

気になる日本と台湾の若い人たちの感想

映画「台湾人生」が公開されて



ドキュメンタリー映画
としては異例のヒット
となった「台湾人生」

映画監督 酒井 充子

二〇〇九年（平成二十一年）六月、東京・東中野の小さな映画館でドキュメンタリー映画「台湾人生」の公開が始まった。台湾の日本語世代が自分たちの人生を振り返るといふ地味な内容の映画を、果たしてどれだけの人が見に来てくれるだろうか。不安を抱えてのスタートだったが、杞憂に終わった。東京を皮切りに全国約三十の映画館で上映され、今年に入っても自主上映会という形でその輪は少しずつではあるが、着実に広がっている。お力添えくださった貴会およびご覧くださったみなさまにこの場を借りて御礼申し上げます。

「台湾の日本語世代の声を届けた」という思いで作った映画を、観客はどのように観たのか。上映会場にいるときには、できるだけ観客の感想を直に聞いた。

「『湾生』で台湾に友人はたくさんいる。日本人に彼らの本音を知らせてくれてありがとう」と言っ、涙を流す年配の男性や、目を真っ赤にして、「旅行で台湾に行っ、どうしてみんなあんなに日本語が上手で、親切なのか不思議だったんです。なんにも知りませんでした」と言う若い女性がいて、この映画を見て泣いてくれる人があることに感動した。そして、登場人

物たちの思いをしっかりと受け止めてくれたことに感謝した。

「これから台湾に行こうと思って観に来た」という人もいた。旅先で出会ったお年寄りに、「日本語お上手ですね」と言っ、終わっ、しまうのではなく、どうしてこの人は日本語を話せるのか、という人生を歩んできたのか、ということに思いを寄せ、対話が始まるきっかけになればうれしい。

日本での劇場公開が始まる約一年前の二〇〇八年（平成二十年）七月、台北で完成報告上映会をした。映画に登場してくれた五人のうちの三人とその家族、友人ら約七十人が足を運んでくれた。映画を観終わっ、登場人物たちが「この映画を作っ、てくれてありがとう」と声を掛けてくれた。その言葉に勇気を得、このとき初めて、「自信を持って日本の人たちに届けられる」と思えた。

そしてその際、登場人物のみならず、その友人たちも口をそろえて言



「平成20年 日台共栄のタベ」で映画「台湾人生」のダイジェスト版を上映した折、酒井監督に台湾との出会いなど撮影の経緯などについてお話しいただいた（平成20年12月23日、アルカディア市ヶ谷）

ったのは、「台湾の若い人たちにも見せてほしい」ということだった。取材を通して、日本語世代が自分たちが若い世代に十分理解されていないことに不満を感じているということは分かっていた。若者が、日本語世代に比べて自分の国の状況に無関心だということや、日本と同じように、若い世代が自国の近現代史をきちんと教えられていない、とも感じていた。

二〇〇九年（平成二十一年）秋、高雄と台北で相次いで上映する機会を得た。いずれの会場にも出かけ、質疑応

答の時間を持った。観客は、日本語世代とその子供または孫世代が中心で、とても温かく受け入れてくれた。

台北の上映会では、講評の映画評論家自身が外省人二世であることを冒頭で宣言し、活発な意見交換が行われた。「台湾人生」という映画が、彼があえて自分が外省人二世であることを表明しなくてはならない状況を作ったのだとも言えるが、その前提にある台湾社会の複雑さを垣間見せられた。

評論家からは「歴史的事象をもっと多面的にとらえるべき」という指摘を受けたが、客席からは「すべてを網羅するのは無理。このテーマを日本人が扱ったことに感謝したい」という擁護もあった。

やがて論点は、自分たちのアイデンティティに絞られていった。日本統治下で日本人として生き、戦後、中華民国国籍となった日本語世代のアイデンティティのゆらぎを見て、自分のアイデンティティを再認識することになっ

たのだと思う。

私自身、台湾の日本語世代に向き合うことで自分が日本人であることを自覚し、日本という国のことを考えさせられたが、台湾の若い人たちもまた、自国の先輩たちの姿を見て、自分が台湾人であること、台湾という国のことを考えたようだ。「自分が『台湾人』であることをきちんと自覚しなければならぬ」と言った彼らは、決して自分たちの国に対して無関心なわけではないのだ。

私は当初、台湾のことをよく知らない日本の若い人たちに見てほしいと思つてこの映画を作った。今後も小さな上映会を重ね、ひとりでも多くの人に観てもらい、直接話をしていきたいと思う。これと並行して、台湾でも上映の機会を増やしていきたいと考えている。「台湾人生」という映画をぶつけてどんな反応が返ってくるのか。台湾のこれからを担う若い人たちのことが、今とても気になっている。